ずっとそばにいるから

りん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ずっとそばにいるから

【Ｎコード】
Ｎ７３２０Ｙ

【作者名】
りん

【あらすじ】
名探偵コナンの原作逆バージョンです。
蘭ちゃんがアポトキシン４８６９を飲まされてしまいます。
投稿が遅れてしまうことがあるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします！！（林檎の葉さん、パクッちゃってすいません・・・）

FILE、1　約束

～工藤邸～

「ネーネー、新一～」
「ん～？」
ここの主、高校生探偵工藤新一は書斎でシャーロック・ホームズの小説を読んでいた。

「私、空手の都大会で優勝したから、トロピカルランドへ連れてって～」
「ん～」
「ねえ、聞いているの？」
「ん～」
「新一ってば！」
「ん～」

今新一と話しているのは、現在、帝丹高校空手部女主将を務めている毛利蘭だ。
蘭はさっきから新一に、トロピカルランドへ連れてってもらおうとがんばっているのだが、新一は聞こえていないみたいだ。
蘭は怒って、
「新一なんか、もう知らない！！」
と言って出ていこうとしたら、新一が止めた。

「蘭、ごめん。確かトロピカルランドの話だったよな！」
「そうだけど、今は推理小説を読まないって約束したら許してあげてもいいけど。」
「読まねーから出ていくなよ。」

「わかったわよ。」

こうしてあっけなく、一つのケンカが終わったのである。

「じゃあ、明日は学校休みだから、明日いこーぜ！」

「分った。じゃあ明日の十時にトロピカルランド前でね。」

蘭は、別れ際にこう言った。

「もちろん、新一のおごりって事も忘れないでね？」

「まじ・・・」

この後、新一が銀行へお金をおろしに行ったのは言うまでもない。

ＦＩＬＥ、１　約束（後書き）

初めての連載小説に挑みます。
頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！！

FILE、2　トロピカルランド

～トロピカルランド～

「ね～新一、どこ行く??」
「蘭が行きたいとこでいいよ」
「ちゃんと考えてよ!」

新一はトロピカルランドの地図を見て、しばらく考えていたが「ここ、いいんじゃねーか」と言って地図を指差した。

「ミステリーコースター、面白そうじゃん!!」
「え～なんか怖そう・・・」
「大丈夫だろ。ほら、行こうぜ!」

～ミステリーコースター殺人事件から1時間後～

「おいおい、もう泣くなよ・・・」
「あんたは、よく平気でいられるわね・・・」

「オ、オレは現場で見慣れているからバラバラ死体とか・・・」
「サイテー！！」
蘭はエーンと言ってまた泣いてしまった。
新一はおろおろしていたが、
「ここで待っていてくれ、すぐ戻るからよー！」
と言ってどこかへ行ってしまった。
蘭はしばらく泣いていたが、落ち着いたのか泣きやんだ。
すると、さっきのミステリーコースターに乗っていたサングラスの黒服男がトイレの隣りの細い道に入っていくのが見えた。
「何しに行くんだろう」
そう思った蘭は後を追うことにした。
「ほらよ！おまえの会社の拳銃密輸の証拠のフィルムだ・・・」
（え・・・）
「悪い事はするもんじゃねーぜ！！」
（うそ・・・新一に知らせなくちゃ・・・）

そこまで思った時、誰かに殴られた。

「こんな小娘に見られやがって・・・」

意識がもうろうとする中、

「あの時一緒にいたもう一人の人だ・・・」

と思った。

「こいつ、殺しやすかい!?」

「いや、拳銃はまずい!! さっきの騒ぎで、サツが、まだうろついている!!」

そう言って、あるケースを取り出した。

「こいつを使おう・・・ 組織が新開発したこの毒薬をな・・・」

蘭に薬を飲ませながら言った。

「フフフ・・・なにしろ死体から毒が検出されない・・・ 完全犯罪が可能なシロモノだ!!

まだ人間には試したことがない、試作品らしいがな・・・」

「アニキ、早く!!」

「オウ・・・」

２人が去って行ったころ蘭の体に異変が起こった。

（か、体が・・・熱い！！！骨が溶けてるみたい・・・も・・・もうダメ・・・）

FILE、2　トロピカルランド（後書き）

ミステリーコースター（ジェットコースター）殺人事件、飛ばしちゃってすいません・・・
すごく長くなる気がしたんで・・・

これからもがんばります！！！

FILE、3　蘭・・・？

「蘭！？」

新一が戻ってくると、蘭がいなかった。

「ここで待ってろって言ったのに・・・どこへ行ったんだ？」

新一はひとまず蘭の携帯に電話してみた。

ＰＲＲＲ・・・

「くそっ。出ねー」

しばらく待っていたが、帰ってくる気配が無いので蘭を探しに行くことにした。

「ん？」

すぐ近くの細い道を通った所に、誰かが倒れていた。

「蘭！？」

倒れていたのは・・・

今日、蘭が着ていた服を着て
しかも顔がそっくりな女の子だった。

しかし、新一と同じ高校生の姿ではなく、小学1，2年生くらいの
子供だった。

「蘭？」

「・・・・ぅ」

「大丈夫か??」

「し・・んいち・・?」

「蘭なのか?　ケガしているじゃないか・・・とにかく家に運ぶからな。」

蘭は新一と家に向かった。

ＦＩＬＥ、３　蘭・・・？（後書き）

蘭ちゃんが小さくなってしまった・・・。

これから、どうなる！？

FILE、4　目覚めたら・・・

～工藤邸～

「うっ・・」

「蘭！？」

「新一・・・？ここどこ？」

「俺の家だ。蘭、気付いていないのか？体の事・・・」

「体？私は別に・・・ってえぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーーー！！！

か、か、体が縮んでるゥ！？　な、なんでェ！？」

蘭はものすごく驚いていた。

それもそうだろう、起きたら自分の体が縮んでいたのだから。

「蘭、いったい何があったんだ？」

「えっと、たしかあの時いた黒ずくめの服の2人組に変な薬を飲まされたの！」

「変な薬？」

「うん。たしか「死体から毒が検出されない、まだ人間には試したことがない、試作品らしいがな」って言ってた。」

「その毒薬の作用で縮んだのか・・・
俺は阿笠博士に相談してみる。蘭、それまで使う偽名を考えとけ。」
「あら、蘭ちゃんがいいんだったら新ちゃんの妹にすれば？」
「母さん！」
「新一のお母さん！」
そこには新一の母、有希子が立っていた。
「いつこっちに来たんだよ・・・」
「ついさっきよ。悪いけど話は全部聞かせてもらったわ。
ロス生まれの新ちゃんの妹ってことにすればいいじゃない」
「蘭、それでもいいか？」
「うん。」
「そーゆー事だから、バーイ♪」
「ちょっと待て。もう帰るのか？」
「えぇ。予定がパンパンだから。じゃーねー！」
2人はしばらくビックリして声が出なかった。

ＦＩＬＥ、４　目覚めたら・・・（後書き）

なぜ有希子が突然現れたんでしょうね・・・

ＦＩＬＥ、５　偽名（前書き）

※新一＆蘭は平次、和葉、快斗、青子と最初から友達になっています。

FILE、5　偽名

「蘭、考えたか？偽名。」

「うーん。花の名前がいいかなって思ってるんだけど・・・」

「花の名前か・・・」

新一は紙を持ってきて、花の名前をどんどん書いていった。

「蘭、向日葵、紫陽花、桜・・・」

「あ！桜がいいな。」

蘭のこれからの名前は、工藤桜、になった。

「じゃあ、ら・・いや桜。お前の正体を知らせておきたい人っているか？」

「えっと、お父さんにお母さん、博士と・・・あと服部君と和葉ちゃん、黒羽君と青子ちゃん・・・それと・・・園子かな。」

「結構いるな。おじさんとおばさん、博士には明日話に行くとして・・・あの大阪２人組はどうする？」

「落ち着いたら連絡を取るかな・・・」

「じゃあ、園子とあの2人はここにきてもらうか。」

「うん。」

「もう遅い、ら・・いや桜もう寝るか。」

「私もお兄ちゃんって呼ばなくちゃね。」

新一は自分のベット、桜はあいていたベットに寝た。

こうして、早いような遅いような1日が終わったのである。

FILE、5　偽名（後書き）

桜ちゃん、これからどうなるのでしょう。

FILE、6　おはよう！

「ん・・・？」

新一が朝起きると、とてもいい匂いがした。

台所へ行ってみると・・・

「あ、おはよう。新・・じゃなくてお兄ちゃん」

「ら・・いや桜、もう起きていたのか？」

「うん。目がさめちゃって・・・」

桜は朝ごはんの準備をしていた。

「あ、そうそう。あの部屋、自由に使っていいぞ。」

「ホント！？」

「それと今日、服買いに行くか？」

桜は新一の昔の服を着ていた。

新一と桜は朝ごはんを食べ終えると、部屋の掃除を始めた。

「結構埃だらけだ・・・」

「まあ、始めようよ。」

「ふぅ・・・。やっと片付いたか・・・」

「結構、時間掛かっちゃったね・・」

掃除に時間を取られたため、服を買いに行くのは午後になってしまった。

FILE、7　買い物

～デパート～

「ん～と、これがいいかな。」

「ら・・桜、どんだけ買うんだよ・・・」

「あと1つ♪」

「ハァ～」

桜と新一は、買い物に来ていた。

「あ～あっちにも、いいのがある！」

「おい・・・」

「じゃあ、これをやめてこっちにするわよ。」

桜は少しふてくされたように言った。

「あ、あっちいこう！」

「お、おい、待てよ・・」

桜は1人でどんどん行ってしまった。

そのため、はぐれてしまった。

「おい、どこいったんだ？」

ピンポンパンポン～

「迷子のお知らせです。米花町からおこしの、工藤新一様。至急、迷子センターへお越しください。」

迷子センターというのは、迷子の子供を預かる、デパートの中にある小さな施設だ。

放送を聞いた新一は、急いで迷子センターへ向かった。

～１０分前～

「君、名前は？」

「も・・じゃなくて、工藤桜です。」

「どこから来たの？」

「米花町です。」

桜は1人でいたため、すぐに迷子センターへ連れられてきてしまった。

そして、女の人からいろいろなことを聞かれていた。

「だれときたの？」

「えっと、し・・いや、お兄ちゃんと来ました。」

「お兄ちゃんの名前は？」

「工藤新一。」

「え？あの高校生探偵の工藤新一？」

「・・・はい。」

「へ～。私、ファンなのよ！　あ、放送入れといたからすぐ来ると思うわ。」

そんな会話をしていると・・・

「桜！！！大丈夫か??」

「あ、お兄ちゃん。大丈夫よ。」

「ハァ、良かった。あ、ありがとうございました。」

「ありがとうございました！」

「いえ。しっかりした妹さんで。」

女の人は少し照れながら言った。

「帰るか。」

「うん。」

～帰り道～

あれだけの事があったのに、まだ3時ごろだった。

「ごめんね。私のせいで・・・」

「いや、いいよ。桜が無事で。」

「そういえば私の事、さっきから‘桜’って呼んでるよね。」

「あ・・・ほんとだ。お前も‘お兄ちゃん’って呼んでるよな。」

「なれちゃったのかな？」

「そうかもな。　これから、おじさんの所へ行くか。」

新一と桜は毛利探偵事務所へと向かった。

ＦＩＬＥ、７　買い物（後書き）

ご感想や意見、誤字などがありましたら教えて下さい。

ＦＩＬＥ、８　毛利探偵事務所（前書き）

※蘭の母親・英理と父親・小五郎は別居していません。
蘭がいなくなったらなにも出来なさそうな小五郎がかわいそうだったからです。
ご了承ください。

ＦＩＬＥ、８　毛利探偵事務所

～毛利探偵事務所～

「なにぃーーーーーーー！！！」

毛利探偵事務所に大きな叫び声が響いた。

～１０分ほど前～

ピンポーン　ピンポーン

「はーい。」

出てきたのは、蘭の母親の英理だった。

「あら、新一君じゃない。どうしたの？あ、昨日はありがとうね。」

昨日、蘭いや、桜がまだ寝ていた時に新一が心配させないために「蘭は家に来て僕が勉強を教えてあげていたげど、疲れて寝てしまった」と言っておいたのだ。

「あ、いえ。今日は話しておきたい事があって・・・」

「なに？」

「どうした？」

そこに蘭の父親、小五郎が出てきた。

「あの、蘭の事で・・・」

「何かあったのか！？」

新一はあった事をすべて話した。

そして今の状況にある。

「じゃあ、その子が蘭だって言うの？」

「はい。今は僕の妹の‘工藤桜’って事になっていますけど。」

「何でお前の妹なんだ？」

「母さんがそうした方がいいって・・・」

「有希ちゃんが？　でも、ここに住めばいいんじゃないか？」

「それはダメです！桜を襲った奴らが生きていたと知ったら、また襲われるかもしれません！！」

「じゃあ新一君。蘭を頼むわね。」

「はい。」

こうして毛利探偵事務所を出た。

「次は、博士の家ね。」

2人は博士の家に向かった。

FILE、9　阿笠邸

～阿笠邸～

阿笠博士にすべての事を話した。

毛利探偵と同じように、ものすごく驚いた様子だったが、

「小学校の転校手続きは、わしがしておこう。それと、いろいろなメカを考えておく。」

と言っていた。

転校日は明日となったから、いろいろな物をようしようと思ったが・・・

ピンポーン　ピンポーン

「お届け物でーす。」

段ボールの中には・・・
ランドセルを始め、かわいいピンクの帽子やら何やら入っていた。

一緒に入っていた手紙には、
（いろいろ使えそうなものを送っておきました。蘭ちゃんに渡しておいてね♪　有希子）
との事。

「ったく、母さんめ。こんなに送ってきて・・・」
と文句を言っていた。

だが、桜に伝えると・・・
「嬉しい！！」
と喜んでいたのは言うまでもない。

FILE、10　転校生

～帝丹小学校～

「ねーねー、今日転校生が来るらしいよ♪」

眼がパッチリしている、カチューシャのかわいい女の子が大柄の男の子とソバカスの男の子とおしゃべりしていた。

「女の子かな～」

「いや、男の子って事も考えられますよ。」

「俺は、どっちでもいいや。」

「はーい、席についてー。今日は転校生がいるわよ。」

先生が「入ってきて」と言うと、桜が入って来た。

クラスは「かわいい～」とか「美人～」とか言う声が聞こえてきた。

「はーい、静かにー。では、自己紹介をしてもらいましょう。」

「えっと、工藤桜といいます。よろしくお願いします。」

桜は少し赤くなりながら言った。

「じゃあ、桜ちゃんはそこの空いている席に座ってね。授業を始めるわよー」

「さーくーらーちゃん」

「ん？何？」

「私、吉田歩美って言うの。こっちの太った子が小嶋元太君。それでこっちのソバカスの子が円谷光彦君」

「よろしく。」

「「「よろしく」」」

こうして、小学校生活が始まった。

ＦＩＬＥ、１０　転校生（後書き）

感想やダメだし等、待ってまーす♪

FILE、11　留学

～帝丹高校～

「ちょっと、どういう事なの新一君!?」

蘭の親友であり鈴木財閥の令嬢の鈴木園子が休み時間を使って新一と話していた。

「どういうって、何がだよ・・・」

「なにって、決まってんじゃない!蘭の事よ!!」

「蘭の事ってなんだ?」（まさか、何か知ってるのか・・・?）

「しらばっくれてんじゃないわよ!今日の朝、先生が言ってたじゃない!!」

園子はものすごく顔を赤くして言った。

「朝・・・？」

「そうよ。蘭が留学したって話よ！」

「え・・・留学？」

「あ、新一君事件で呼び出されてていなかったんだっけ？」

（あー。おばさんがそういう風に言っておいたのか・・・）

「そのことなんだけど、今日、俺の家に来てくんねーか？」

「何でよ・・・」

「大事な話があるんだ。」

新一は真剣な顔で言った。

園子は少し考えていたが、「しょうがないわね・・」と言ってＯＫをした。

～工藤邸～

「で、話って何よ。」

「それは・・・」

新一は全ての事を話した。

「えーーーーーー　その子が蘭！？」

「あぁ。今は俺の妹って事だけどな・・・」

「名前はなんていうの？」

「工藤桜だ。」

「ほー。いい名前だね・・・このネーミングセンスで行くと、考えたのは蘭ね。」

「ハハハ・・・」

「園子。この事は、誰にも言わないでね。」

「はいはい。わったわよ、ら・・じゃなくて桜ちゃん。」

「ありがとう。」

園子は帰りに、「名前を覚えなきゃな・・・」と言っていた。

ＦＩＬＥ、１１　留学（後書き）

えーっと、どうでしょうか？

ＦＩＬＥ、１２　快斗＆ａｍｐ；青子

～工藤邸～

「なんだよ、話って。」

「蘭ちゃんに何かあったの？」

新一にそっくりな青年と蘭にそっくりな少女が聞いた。

「あぁ。」

今まで同様、すべてを話した。

「なにぃぃぃぃーーーーーーーーーーーーーー」

「ウソーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

2人は驚いていた。

まあ、驚くなという方が無理なのだが。

「今は、俺の妹の工藤桜になっている。」

「桜ちゃん・・・」

「覚えとくよ。」

ピンポーン　ピンポーン

「ん？誰だ？？」

「わしじゃ、わ・し・。」

「博士か～。」

「メカの試作品が出来たぞ！」

「じゃー、俺らは帰るから。」

「じゃーね。桜ちゃん？」

「うん。バイバイ、快斗お兄ちゃん。青子おねえちゃん。」

少し顔を赤くしながら言った。

その後、青子が「かわいい～」と連呼していた。

「で、発明品ってどれだ？」

「これじゃ！」

「・・・・・・は？？」

「ただのメガネじゃねーか。」（しかも俺、メガネかけねーし）

「ただのメガネじゃない。‘犯人追跡メガネ’というものじゃ。」

「どう使うんだ？」

「左レンズに２０キロ以内の発信機の現在地がレーダーで映るようになっている。」

「なんか、スゲーな！」

「こっちの発信機は桜君。メガネの方は新一が持っておけ。万が一、迷子や誘拐された時役に立つだろう。」

「ありがとう、博士♪」

桜は満面の笑みを見せた。

ＦＩＬＥ、１２　快斗＆ａｍｐ；青子（後書き）

何かやってほしい話などはありますでしょうか？

ＦＩＬＥ、１３　少年探偵団（前書き）

連載、遅れてすいません。
ちょっとネタ切れで・・・

FILE、13　少年探偵団

～帝丹小学校　休み時間～

「何かのクラブみたいなの作ろうよ！」

そう話してきたのは、歩美だった。

「クラブ・・・ですか？」

「うん。」

「何でそんなの作ろうと思ったんだ？」

「みんなともっと仲良くなりたいから♪」

歩美は、小さく鼻歌を歌っていた。

「じゃあ、何のクラブにする？」

桜は聞いた。

「「「う～～ん」」」

「読書クラブなんてどうですか？」

「つまんなそーだな」

「お花クラブは？」

「女っぽいな。」

「じゃあ、元太君は何がいいんですか？」

「食べ物クラブなんてどうだ？あ、うな重クラブでもいいな～」

「「「絶対ダメ！！！」」」

（クラブかぁ～。何がいいかな？）

「少年探偵団・・・」

「「「「え・・・？」」」」

桜は無意識に声に出していた。

「いいですね～」
「なにすんだ？」
「困っている人を助けるのよ。」
「仮面ヤイバーみたいだな。」
「じゃあ、少年探偵団でいい？」
「いいよ♪」
「いいんじゃねーか」
「賛成です。」

こうして、４人のクラブ名は、少年探偵団、となった。

ＦＩＬＥ、１３　少年探偵団（後書き）

感想、アイディア等待ってます♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7320y/

ずっとそばにいるから

2011年12月11日11時47分発行